

異人たちとの夏



山田太一

新潮社

山田太一
人たちの夏



新潮社

異人^{いじん}たちとの夏^{なつ}

一九八七年二月一〇日 印刷

一九八七年二月一五日 発行

著者 山田^{やまだ}太^{たい}一^{いち}



発行者 佐藤^{さとう}亮^{りやう}一^{いち}

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
業務部〇三(二六六)五一一・編集部〇三(二六六)五四一一

定価 九八〇円

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 大口製本株式会社

©Taichi Yamada, printed in Japan, 1987
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-360602-9 C0093

異人たちとの夏

装画 * デビッド・ホックニー

妻子と別れたので、仕事場に使っていたマンションの一室が私の住居になった。

テレビドラマの脚本を書くのが職業である。多くの時間、ひとりで部屋にいる。少し前には、やって来る女がいたが、妻と別れ話をしているうちに離れて行き、それはそれでよかった。離婚で多量の感情を費し、人間との接触は、快樂を含めて、しばらくは沢山だった。

マンションの夜が静かなのに気がついたのは、独りになって三週間ほどたったところである。静かすぎるのだ。

といって、山の中にいるようだというのではない。

それどころかその七階建てのマンションは、東京の環状八号線道路に面していて、車の

流れは二十四時間絶えることがなかった。

はじめは車の音で、眠れなかった。

深夜を選んで走る大型トラックの地鳴りのような音が次々と湧き上るのをベッドの上で聞いていると息苦しくなつて来た。百メートルほど先に信号があり、時折音は途絶えるが、それは忽ち更に高い発進音としてよみがえり、あとからあとから轟音が続き、すると動悸が高くなつて、急に呼吸が出来ないというさしせまった感覚に襲われ、あえぎながら、とび起きたりした。

十日ほどで馴れた。

仕事場として使っている間、何度か泊ろうとしたことがあり、その度にとてもここでは眠れないと思つたのだが、離婚で金を使い、他に移る余裕がなく、無理にでも眠るしかないとなれば、こんなところでも人は馴れることが出来るのだつた。轟音は意識の底へ沈み、エア・コンディショニングの音もしりぞいて、気がつくと柱時計の秒針が刻む音だけを聞いていることもあつた。

そして更に、静かすぎるなどと感じてしまうのだから、自分の感覚ながら、まったく行方が知れなかった。

静かすぎるとはじめて感じたのは七月中旬のある夜である。十一時すぎ、机に向つてい

て急に背筋に寒けのようなものが走った。ひとりで暗闇の中空にぼつんというような気がした。

「静かすぎる」

しかし暫くは抑圧して書きすすみ、辞書を取り、判然としない字を確かめっていると、この数日、夜になると意識の底にその感じが不安のようにちらついていたことに気づいた。

私は手を止め、耳をすました。車の走行音の奥に、別の音を求めたのである。なにも聞えなかった。

離婚による一種の神経症かもしれない。幹線道路の側のビルを静かすぎると感じるのは、普通ではなかった。しかし、離婚は私が望んだことである。そして妻も、はじめはいろいろいったにせよ、二人の間にある主感情が無関心であることは認めたのだし、妻も空虚をかかえていて、結局のところ離婚に希望を託したのだ。経済的な条件で少しごたごたしたが、悪い離婚ではなかった。少なくとも、あのままあたりさわりのない表情をつくって同居を続けるよりは、はるかに生きる力の湧く行動だった。

「いい出してくれて、よかったわ」

最後に妻はそういった。言葉通りに受けとるのはどうかとしても、それに近い感情はあったはずだった。いや、妻の方とはともかく、いい出した私の方が今更孤独でもなかった。

静かすぎるからどうだというのだ。

私は立上り、窓に寄り、カーテンをあけた。窓はあけない。あくようには出来ているが、あけても外はおそらくおとろえない暑さと濃密な排気ガスと車の走行音だけであった。

窓から駐車場を見下ろした。全部が見えるわけではないが、車の数の見当はつく。

一台だった。視野にはピンクのバンが一台あるだけで、あとは白いラインで区分けされたコンクリートの空間だった。昼間はこれが一杯になってしまう。ところが暗くなるにつれ、次々と車は去り、昨夜も停っていたピンクのバン一台になる。

昨夜も？　そうか。昨夜もこうして私は眼下のコンクリートを見ていたのだった。

大学二年生になる一人息子との離別が、どこかでこたえているのだろうか？　そんなはずはない。ほとんど自分の世界にとじこもり、顔を合わせることも少なかった息子と別れて、改めてなにを淋しがりようがあるだろう。

私は机の上のペン皿から部屋の鍵をとり、ポケットに入れた。灯りはつけたまま、廊下に出た。確かめるつもりだった。静かすぎる、と感じたことが、気持の弱りのせいだと思いたくなかった。事実、静かすぎるのだ、人がいないのだ。それを確かめたかった。この排気ガスとエンジン音に漬ったひどいマンションに、住もうとする人がいないのは当然ではないか。こんなマンションは事務所として使うしかないのだ。

七階の他の四部屋の、少なくとも廊下に面した窓は暗かった。エレヴェーターのボタンを押す。

事務所が多いとは知っていたが、これほどとは思わなかった。夜になると大半の人間がいなくなってしまうのだ。たしか四十一戸の部屋があるはずであった。多分、各階に一戸か二戸しか人が残らないのだろう。

エレヴェーターが扉をあけた。

無人の箱に入る。いまだにマンシヨンのエレヴェーターがひらく瞬間に馴れなかった。いきなり人と顔を合せることに、ひるみがあった。誰もいないと、小さくほっとした。

一階へおりる。冷房のないむっとする薄暗い狭いロビーを歩いて、玄関のドアを押して外へ出た。

相変らずのエンジン音と排気ガスとわずかに夜気の涼しさをとり戻している外気の中を、駐車場へ歩いた。

窓からは見えなかったところに二台の乗用車が停っていた。ピンクのバンには笑っている三匹のリスの絵が描かれ、子供服のメーカーの営業車であることが分った。

私はその車の傍らに立ち、マンシヨンを見上げた。この側面が東南に面している。どの部屋にも窓があった。人がいれば灯りが見える筈である。

一つだった。それは七階の私の窓で、他のどの窓も暗かった。

「驚いたね」

呟いて暫く私は暗い窓の列を見上げていた。各階に一、二戸どころか、本当に誰もいないのだ。十一時すぎに灯りがひとつなのである。神経症ではなく、本当に静かすぎるのだ。すでに寝ている人がいるかもしれないが、いたとしても一戸か二戸ではあるまいか？

私は小さな誇りを回復した気持で、またゆっくり玄関に戻った。入るのは、出るより面倒だった。玄関のドアの脇の壁面にある鍵穴に部屋の鍵を入れて回さなければならぬ。すると、ドアのロックが二十秒ほど切れるのである。その間に入るという仕掛けだった。ついでに言えば、部屋に誰がいる時は鍵なしでもいい。インターフォンと並んでブッシュボタンがあり、部屋のナンバーを押すと、その部屋に声が届いた。誰であるかを名乗ると部屋の中で玄関のロックを切ることが出来る。それもやはり二十秒ぐらいで、その間にドアを押してロビーへ入るのである。警戒はそれで充分ということだろうか。夜は管理人も帰ってしまっていた。

「ひとりか。このビルの中にひとりか」

やや無理にでもそう思いたい気分が私の中にあり、ロビーの隅のソファへ乱暴に腰をおろした。幾分不気味な気がしないでもなかったが、この大きなビルにひとりでいると思う

と、少年時代がよみがえるような、素朴でどきどきするような自由感があつた。

しかし、それはほんの一分というところだつた。外に気配があり、私はどきりとして身をひくようにした。

ガラスのドアの向うに人が立つのが分つた。ゆっくりその方を見ると女であつた。バッグをさぐり、鍵を出している。あまり若くはなかつた。三十代の半ばというところか。たつたいま私がしたように、女は鍵穴に鍵をさしこんだ。私は身を固くした。こんな時間にロビーのソファにかけているというのは、やや普通ではない。女を驚かすような気がした。ロックが切れ、ドアがあいた。私は顔を伏せた。女の靴音が急ぎ足でエレヴェーターに向う。白い靴と形のいい足が私の視野を横切つた。歩調は変わらず、私に気がつかないようにも思えた。だつたら、その方がよかつた。

女の足はたちまち開いているエレヴェーターに入り、機械音がしてドアが閉まつた。私は顔をあげ、エレヴェーターを見た。立上つた。昇降ランプが三階で止るのが見えた。

2

それから四、五日がたち、R局のプロデューサーの間宮が、電話で「これから行っているですか？」という。夕方だった。

同じ四十七歳で、十年近くの間、六本のドラマと一緒につくっていた。そのうち二本の連続ドラマと一本の短篇が、私には大事な作品になっていた。略歴に主な作品として書きこむような仕事になったのだ。そのせいばかりではないが、私は間宮が好きだった。水くさいところも性に合っていた。仕事で長くつき合っている私生活のことを口にするのがなく、口調も崩れなかった。「急で悪いのですけれど」というようないい方をした。

「いいですよ。どうぞ」

なつかしかった。ここ一年近く、なにもいって来なかったのである。私は注文があった

順にスケジュールを埋めて行くタイプである。あとからもっといい仕事が来るだろうという予感があつても、あいているのに来た仕事を断るということは、まずなかった。本当はこのあたりで間宮と仕事が出来るといいのだが、と思ひながら、他の仕事で予定を埋めてしまったところがあつた。今頃なんだ、という不服がなくもなかったが、可能なら、少し無理をしても間宮との仕事はしたかった。

大事な俳優だが、のむと荒れる男がいた。その時は荒れるというのではなかったが、青山の酒場で、裸踊りをはじめたのである。そういうことが似合う店ではなかった。露骨に不快そうな顔をする他の客もいて、私は止めたかったが、止めると荒れそうな感じがあり、動けずにいた。すると隣の間宮が立上った。同席の四、五人は、みんな間宮が止めにかかると思つたはずである。私もそうだった。ところが、間宮は一緒に踊りはじめたのである。踊りながら脱ぎはじめ、俳優とかけ合いのように唄う猥歌も堂に入つていて、そんな芸のあることに私は驚いた。間宮には時折そのように意表をつかれるところがあり、その都度彼の魅力が加わるように、私は感じた。独り暮しだった。少なくとも、そういうことになつていた。人からの話だと、小型飛行機を持つていて、余暇の大半は、調布あたりにいるという。しかし、間宮から、そういう話を聞くことはなかった。逢うと当面の仕事の話で終始した。私もそれが快くないこともなく、途中からは意識して私生活については触れぬ

ようにした。間宮も私のことを聞かなかった。

だからその日、椅子にかけた間宮が、冷蔵庫からビールを出している私に、食事はどうしているのか、と聞いただけで、二人の間が少しこわれたような気がした。そんなことを間宮に聞かれたくなかった。

「こないだの二時間見ましたよ」と私は彼の作品のことをいった。

「どこにも現われないそうじゃないですか？」と間宮がいう。

かまわず私はビールを注ぎながら、彼の作品について話した。ほめたので間宮は「嬉しいな」といったが笑顔はなかった。ビールも一口のんだだけでグラスを置いた。

「まさか、おくやみに来てくれたんじゃないでしょうね？」

「そうじゃありません」と間宮は、はじめて少し笑顔を見せた。

「一瞬ね、離婚した男を訪ねた世間一般は、礼儀としてそういう表情をするものか、と思つた」

「そんなことはないでしょう」

「なんですか？」

「ええ」

間宮は目を伏せた。

「嫌なことですか？」

たしかにプロデューサーが突然やって来る時は、まずろくなことがなかった。企画をすすめていたドラマの時間がクイズ番組になるとか、視聴率がよくないので放送中の連続ドラマが打ち切りになるとか、主役がさっきマリファナで逮捕されたとか、女優が結婚したばかりで、どうしても他の男とキスするのは嫌だといっているのでキスなしですましてはいけないか、とか。

しかし、当面一緒に仕事がない間宮の暗い顔は見当がつかなかった。すると間宮がいった。

「息子さんと逢わなくても、いいんですか？」

急に不当な非難をされたような気がした。間宮と息子とがうまく結びつかなかった。表情をおさえて私は聞いた。

「どういうこと？」

「奥さんに逢ったんです」

偶然どこかで逢ったということだろうが、彼女が離婚についていろいろ話したとすれば、やりきれないことだった。そういうつき合いを一番すまいとしていた男なのに。

「なにか彼女が頼んだのですか？」

「いえ。ただ、月に一度は息子さんに逢うとか、そういうルールをつくらなくてもいいのかと思ったのです。私です。つまり、頼まれたとかいうのではなく、私が、そういうことは必要がないのか、と思ったのです」

間宮が少し上気した顔で生真面目まじめにそんなことをいうのが意外だった。

「中学生ぐらいまでなら意味があるでしょうけど」と私はいった。「息子は十九です。逢いたければ来ればいいのですから」

「こちらから逢いたい、ということはないのですか？」

「なくはないけど、月一回逢うというルールは息子には迷惑でしょう。自分の十九歳をふりかえっても、月に一回親父と二人で飯を食えといわれたらやりきれないと思うな」

間宮は納得したように、うなずいた。

「しかし嬉しいな」と私はいった。「意表をつかれたけど嬉しい。あなたが、こんなことをいつてくれるとは思わなかった。こういうことには口をつぐむ人だと思っていた」間宮のグラスにビールを注ぎ足し「ぼくも結局人情癖にんじやうばなしが好きなんだな。そういう心配はされたくないと思っていたのに、いわれてみると、はつきり今嬉しいな。仕事の話じゃなくて、がっかりだけど」

「それもあるんです」と間宮がいった。